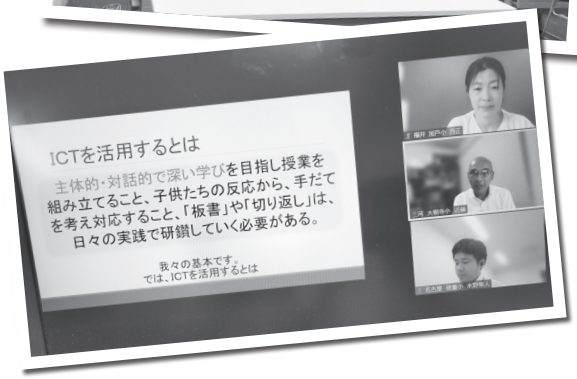
第132号　令和５年度　No.2　２月

愛視協だより

発　行　愛知県視聴覚教育研究協議会
事務局　名古屋市東区東桜１－13－３
ＮＨＫ名古屋放送局内
TEL（052）952 － 7293

第61回 東海北陸地方放送教育研究会
第55回 愛知県放送教育特別研究大会

研究主題「未来を拓く学びの場を創造しよう」



期　日　令和５年８月24日（木）
会　場　ウインクあいち（オンライン形式）
主　催　東海北陸地方放送教育研究協議会
　　愛知県視聴覚教育研究協議会
　　NHK名古屋放送局
共　催　全国放送教育研究会連盟
　　一般財団法人NHK財団
後　援　文部科学省　こども家庭庁
　　愛知県教育委員会　名古屋市教育委員会
　　愛知県教育振興会　名古屋市教育会

第55回愛知県学校視聴覚教育研究大会

研究主題「主体的に学び、明るい未来を切り拓くことができる子どもの育成
―ICTを活用して新たな可能性を引き出す授業・業務改善―」

日　時　令和５年１１月１７日（金）
会　場　豊田市教育委員会（オンライン開催）
内　容　実践発表（１部：４分科会　２部：４分科会　計８分科会）

記念講演会

ICTを活用した、子どもたちが自ら学びを決めていける授業づくり

講　師　園田学園女子大学　人間教育学部　教授
堀田　博史 氏

GIGAスクール構想が３年ほど前に起こり、学習者用の端末等、校内に高速なネットワークが整備された。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実、いわゆるNext GIGAを見据え、我々教師は授業改善を進めている。

「個別最適な学び」は、指導の個別化と学習の個性化に整理されるということは周知のことだと思うが、大切なことは、個々の児童生徒が自己調整しながら学習を進めていく指導である。要は、児童生徒が主語だ。我々は､児童生徒が自己調整を自らしていく学習形態で、指導していかないといけない。指導の個別化というのは、従来、我々教師が子どもたちの特性や学習の進度、到達度を見据えながら、指導を個別に柔軟に行ってきたものである。いわゆる教師の長年の勘で、個別に支援をしてきたものだ。しかし、この指導の個別化には、限界がある。そこで、AIを利用する価値が生まれる。子どもたちの学習ログ、デジタルデータをAIに分析させ、我々が子どもたちの一人一人の特性や進度に合わせて指導を個別化するときに、我々をアシストしてくれるのである。一方、学習の個性化は、子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題を我々教師が提供するということである。しかし、子どもたちが、意図的に自分自身の学習を最適となるように調整させるという意味で、子どもたちが主語となるようにしていかなければならない。

「協働的な学び」においては、探究的な学習や体験活動などを通じて、子ども同士や地域の方々を初めとする多様な他者と協働することが必要不可欠である。その際、教師が、児童に、自分たちが協働的に学んだことが役立つのかどうかを試し、振り返らせる場を設定する必要がある。

そのような現状の中で、「個別最適な学び」においてNHK for schoolの番組、動画クリップなどは、子どもたちにとって自分たちの学習を最適化する方法を提供してくれるので有用である。教師がNHK for schoolの「考える授業やるキット」を活用して指導することも有効である。そういったコンテンツの活用を進めていくと、児童生徒に情報活用能力が不可欠だということがよくわかる。ここでいう情報活用能力とは、学習活動において、情報（情報のデジタル、アナログ問わず）を比較・整理し、発信・伝達して、そして必要な情報を保存・共有することができる力のことである。情報活用能力を育成することを通して、児童生徒は、自分の学習を調整することができるようになっていく。

最後に、探究的な活動の際、子どもたちが自己評価する方法論について解説する。探究的な活動において、NHK for schoolの番組や動画クリップを見たり、そのプレイリストを作ったりして、自らの課題についてある程度解決したところで、子どもたちが自己チェック、自己評価できる仕組みが必要である。そこで、子どもたちが自らの学習を調整するために、授業目標に対応したルーブリックやチェックリストといったものが求められてくる。単元目標や本時のめあてにどの程度近づけたかを判断する基準が必要になるということである。教師が提示した課題が解けたかどうかだけではなく、その単元の目標とか本時のめあてにどの程度迫ることができたかというのを、子ども自身が学習を調整し、学び方を決めていくわけだから、それを児童生徒自身が評価できるような仕組みを作らなくてはいけない。

また、教師の授業改善の効果を見取るためにも、同様の基準が必要である。児童生徒が自ら自己調整できたかどうかを、何をもとに教師が見取るのかを明確にするために、ルーブリックやチェックリストのようなものを用意しておく必要がある。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」について、教師は子どもたちを支援するが、主体的に調整するのは子どもたち自身である。それを支える、主体的に調整できる力を育成するために、情報活用能力を育てることが不可欠である。

第1部会　感じる心を育てる部会

提案者　提案１　水野　隼人（名古屋市立徳重小学校）　提案２　西正　治子（坂井市立加戸小学校）

助言者　近藤　雄一　氏（岡崎市立大樹寺小学校）

【ハートの色塗り】
意見を色で表す→感覚的に表現しやすい

赤→謝る　　青→謝らない

提案１では、NHK for Schoolの道徳教材を活用し、自分の考えを深めたり、意見交換をしたりする授業実践が報告された。タブレット端末を利用し、児童が自分の考えを書き込むことで、その意見をペアやグループ間で共有することができた。また、伝え合う活動を円滑にするため、思考ツールやワークシートの工夫が紹介され、自分の考えを整理したり、考えの変化に気付いたりする場面で役に立つことがわかった。

提案２では、自ら進んで考え、学びを深める児童の育成を目標とし、小学2年生の生活科と道徳におけるICT活用の実践が報告された。表現活動や、対話を促す学習形態の工夫という点においてタブレット端末を活用することで、子どもたちが知的好奇心をくすぐられ、探求心をもって学習に臨めることが紹介された。また、学習成果を発表する際にも、タブレット端末の発表ノートを使い、多様な表現方法を組み合わせた活動ができたことや、他者を評価する際には、グループワーク機能を用い、「いいね」♥や「ぎもんに思った」！などのスタンプによる評価により、一人一人が主体的に参加できるよう工夫された。

助言者からは、今回の２つの研究実践において、ICTの「可変性」「遠隔性」「即時性」の３つについて効率的に活用できていたことを評価していただいた。また、今後ICTを活用していく中で、本物に触れる体験を大切にしつつ、日々進歩するICT環境に対し、教師も知的好奇心を忘れることなく、授業で活用することが求められているとのことだった。

第2部会　デジタルコンテンツ活用部会

提案者　提案１　玖田　加奈（一宮市立末広小学校）　提案２　大橋　雅史（名古屋市立大杉小学校）
提案３　野村　尚之（高浜市立吉浜小学校）

助言者　石田　善仁　氏（名古屋市立日比野中学校）

提案１では、児童がデジタルを通して自分の思いをのびのびと表現することを目指し、プログラミングを取り入れた国語科の授業実践が報告された。４～６年生の３年間の物語教材で継続的に実践が行われており、「ごんぎつね」「大造じいさんとガン」「やまなし」で物語の中心人物の心情曲線をプログラミングソフト「scratch」を使って表すことで筋道を立てて考えることができるようになった。また、色・音・動きを加えてプログラミングすることで、言葉だけでは表現できないことも表現することができるようになった。学年間の交流、学級での全体発表、音読劇の発表などの協働学習に取り組んだり、イメージした内容をプログラミングで表現しようとトライ＆エラーを繰り返したりして、児童が主体的に学習に取り組む様子が報告された。

提案２では、児童が動画を通じて主体的に学び、発信力を高めることを目指し、NHK for schoolのクリップ動画とロイロノートのWebカード機能を活用した理科での実践が報告された。「生物どうしの関わり」において、児童は、教師が用意した動画クリップから関心をもったものを選び、主体的に学ぶことができた。まとめではWebカードとNHK for schoolの再生時間指定機能を活用した分かりやすい発表をすることができた。動画という情報に対して受動的であった児童に動画を切り抜いて発表させたことで動画の内容の要点を押さえて活用することができるようになった。

提案３では、児童が仲間と共に自主的に行動できるようにすることを目指し、NHK for schoolとロイロノートを活用した学級活動の実践が報告された。学校での困りごとを疑似体験させるためにNHK for schoolの「u&i」を視聴させ、ロイロノートのアンケート機能や共有ノートを使用し、自分や友達の困りごとの理解を深めたり、解決法を考えさせたりすることができた。また、自分について、キャンディチャートを使用して考え、自分のよさと苦手なところを自分説明書にまとめ、友達に伝えることができた。

助言者からは、「これまでの教育とデジタル」、「デジタルコンテンツの活用」、「学習支援ソフト」の３つの視点から助言をいただいた。一人１台端末の整備により、いつでもＰＣ・インターネットを使用することができるようになり、表現方法が多様になったこと、デジタルコンテンツを活用することにより学習者が学びの受け手から発信者に変化したことや著作権への配慮が必要であること、学習支援ソフトについては自治体ごとに導入されているものが違うことからどのソフトが使いやすいのかを分析し、実践の積み重ねとデータの共有をしていくことが重要であるとのことだった。

第3部会　情報モラル研究部会

提案者　提案１　北洞　明子（清須市立清洲小学校）　提案２　家田　翔平（名古屋市立稲葉地小学校）
提案３　岡本　光司（金沢大学付属小学校）　提案４　浅野　晃範（蒲郡市立西浦小学校）

助言者　辻村　　忍　氏（名古屋市立苗代小学校）

提案１では、児童がインターネットの特性を理解し、マイルールをつくる実践が報告された。実践では、児童がインターネットに関する用語や知識についてのクイズを作成する活動を行うことで、ルールづくりに対する意欲を向上したり、トラブル事例を基に、普段から自分の権利も他人の権利も大切にしようという意識付けをしながら、学校放送番組を活用してマイルールを設定したりすることができた。マイルールの振り返りでは、保護者からのコメント欄を設けることで、各家庭との連携を図ることができた。

提案２では、目的や意図に応じて、信ぴょう性の高い情報を収集する実践が報告された。学校放送番組の内容を基に作成したウェビングマップを手立てとして用いることで、検索エンジンの効果的な使い方を考えることができるようにしたり、読者投稿型サイトの特性を児童同士で意見交流をして考えを深めたりすることができた。実践後の姿として、他教科の学習においても本実践での学びを活かし、目的や意図に応じて、信ぴょう性の高い情報の収集を行う姿が報告された。

提案３では、メディアリテラシーの向上を目指した実践が報告された。ゲストティーチャーを招いて情報の発信に関する講演会を行ったり、算数の学習で送り手と受け手の視点をもって、活動の振り返りを行ったりする実践が報告された。今後は年間を通した具体的なカリキュラムの設定を勧めていきたいとの報告もされた。

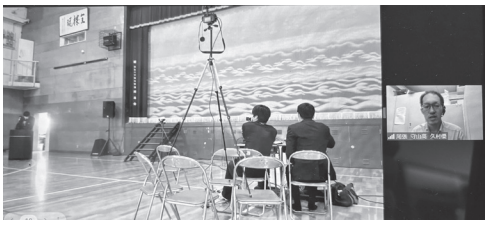
提案４では、インターネットに関する生活習慣のアンケート結果から、児童の実態に応じた情報モラル教育を進めていく実践が報告された。児童、保護者、教員で発足した地域学校保健委員会を行い、ＳＮＳの特性を理解したり、地域に向けた「保健だより」を発行したりする中で、児童の情報モラルを高めることができた。また、自治体で発行されている情報モラル教育の手引きにある道徳の学習ともつながりももたせた。これにより、きまりを守ることの大切さについても、実践の中で考えることができたと報告された。

助言者からは、今後の教育現場では、加害者にならない児童の育成、インターネット上の問題の未然防止という視点が大切になってくる。そのため、情報モラル教育がより重要になってくるという意識を授業者が高くもち、今後も研究を進めていただきたいという助言をいただいた。

第4部会　メディア研究部会

提案者　提案１　久村　　優（県立守山高等学校）　提案２　田代　悠子（名古屋市立緑高等学校）

助言者　山田　公一　氏（愛知県総合教育センター研究部経営研究室）



提案１では、生徒がICTを簡単で身近なものとして認識し、活用方法を楽しみながら理解できるよう「総合的な探究の時間」の中で段階的に取り組んだ実践が報告された。具体的には、コロナ禍での「３年生を送る会」で体育館と教室をオンラインで繋いだライブ中継、その次の段階としてICTとスマホを連携させて学校全体でゲームやクイズ大会を行った。コミュニケーションツール以外の使用方法を知って楽しむことができ、目標を達成できた。

提案２では、英語科において、ICTを活用してリアリア（実物教材）である国内外のニュースメディアを使用した言語活動を行い、英語学習の関心・意欲を高める取り組みと実践について報告された。一人一台端末以前の令和３年度からの取り組みと学習者への効果を時系列で比較し、ICTによるリアリアのより効果的な活用法を考察した。その中で、スピーキングにおいてペアグループの会話を録音させて自分のスピーキングを振りかえりやすくする工夫や、コロナ禍による海外の無料教師用アプリの積極的活用方法についても紹介された。

助言者からは、メディアやICTを活用した単元構想や授業準備を進めると、予定調和な授業になりがちで、生徒の新たな気づきや主体性の芽を摘む場面が出てくることもあるが、大切なのは学習者を中心とした授業デザインであり、生徒の成長や変容を読み取って次の手立てに生かすことが必要であること、コロナ禍や国際情勢の不安定化など未来の予測が難しい時代において、能動的に学び続ける人材を育成するために、教師が「教えるプロ」だけではなく「学びのプロ」として生徒に意欲の火をつけるトリガーになることが肝要である、とのお言葉をいただいた。

第27回視聴覚教育総合全国大会
第74回放送教育研究会全国大会　合同大会

大会テーマ　「未来社会に向けて生涯にわたる学びを支えるメディア活用」
期　　日　令和５年11月11日（土）

本年５月に新型コロナウイルス感染症による様々な活動の制限がなくなった。その間、子どもたちの日常も大きく変化した。

学校ではＩＣＴ環境を駆使し、society5.0社会へ対応するための新しい学びの創出に向けて実践に取り組んでいる。そのような時代だからこそ「視聴覚教育・放送教育」の果たす役割がますます高まっていると推察できる。

本年度もオンライン開催となったが、セミナー３講座、ワークショップ３講座、12に及ぶ実践報告等、充実した内容の大会となった。参加者の実践意欲をかき立て、授業改善に役立つ、興味深い内容となった。

第55回愛知県学校視聴覚教育研究大会

１　日　　時　令和５年11月17日（金）　13：30 ～ 16：15
２　場　　所　オンラインライブ配信（Teams）
３　日　　程　開会行事　　13：30 ～ 14：00
【分科会①】　14：15 ～ 15：15
Ａ：ＯＪＴの活性化
Ｂ：協働的な学びの推進
Ｃ：個別最適な学びの推進
Ｄ：教育情報セキュリティーポリシー及びデジタル・シティズンシップ教育の推進
【分科会②】　15：30 ～ 16：15
Ｅ：多忙化解消プランに基づく業務改善に推進
Ｆ：安心・安全・快適なネットワーク環境の構築
Ｇ：データに基づく学校教育の推進
Ｈ：プログラミング教育の推進

４　研究主題
「主体的に学び、明るい未来を切り拓くことができる子どもの育成
―ICTを活用して新たな可能性を引き出す授業・業務改善―」

５　概　　要
⑴　開会行事
変化の大きいICT教育の状況に対応するため、豊田市は市内全校一斉での研究推進を行ったことについて概要説明。具体的な研究、取り組みについては、分科会にて紹介する形がとられた。
⑵　分科会
「Ｃ：個別最適な学びの推進」では、『⑴ 教職員の授業におけるICT活用指導力向上のための取組』について、『⑵ 個別最適な学びを推進するために導入した「Qubena」の活用状況と効果』について、『⑶ 通級指導におけるICT機器の活用』について、『⑷ 日本語指導が必要な児童生徒への活用』についての４点について発表があった。ICTを知識技能の習得の効率化や個に応じた支援に活用することで子どもたちの学びを深める実践が報告された。
「Ｈ：プログラミング教育の推進」では、プログラミング教育の指導の現状から、教員の指導力向上のための取組について、職員研修とネットワーク環境整備の面について発表があった。
市内全校一斉に行うメリットを生かし、ICTを円滑に活用できる環境づくりを進めることで、教職員のICT活用授業力を高め、児童生徒に主体的に学び、明るい未来を切り拓く力を育むための取組がなされていることが報告された。

第40回 ＮＨＫ杯 全国中学校放送コンテスト愛知県大会

令和５年７月１日（土） ＮＨＫ名古屋放送センターにてデータ審査で開催

７月１日（土）県下の16校からのエントリーを受け、録音・データ審査にて第40回ＮＨＫ杯全国中学校放送コンテスト愛知県大会が行われた。「ラジオ番組部門」３作品「テレビ番組部門」６作品「アナウンス部門」30名「朗読部門」33名のエントリーがあり、これまで培ってきた力を出し切った成果を競い合った。結果は、下記のとおりであった。

ラジオ番組部門

最優秀 名古屋市立神丘中学校
「イロんなかたち」

優　秀 名古屋市立大曽根中学校
「何とかしてあげたいけれど…」

テレビ番組部門

最優秀 名古屋市立神丘中学校
「ツナグ　～魔法の言葉～」

優　秀 椙山女学園中学校
「立ち寄り禁止って言うなら…」

優　良 岡崎市立北中学校
「身近な犯罪」

入　選 半田市立亀崎中学校
「プロフェッショナル　～学校の流儀～」

朗読部門

最優秀	名古屋市立神丘中学校	堀田莉子
優　秀	椙山女学園中学校	大原寧々
	名古屋市立神丘中学校	橋　桃香
優　良	金城学院中学校	蜂谷愛理
	名古屋市立大曽根中学校	稲葉遥子
	椙山女学園中学校	横田京香
入　選	名古屋市立神丘中学校	北林拓人
	金城学院中学校	照屋陽七海
	名古屋市立北山中学校	高橋采希
	名古屋市立北山中学校	島本大輝

アナウンス部門

最優秀	名古屋市立神丘中学校	中村洸太郎
優　秀	金城学院中学校	遠藤美優
優　良	南山中学校女子部	渡邉智莉子
	名古屋市立北山中学校	川上玉絵
	南山中学校女子部	河合美柚
入　選	名古屋市立神丘中学校	鈴木悠生
	名古屋市立神丘中学校	水野璃彩子
	金城学院中学校	中村朱那

第40回 ＮＨＫ杯 全国中学校放送コンテスト全国大会

予選　令和５年８月５日（土）、６日（日） 非公開
決勝　令和５年８月16日（水）　会場　千代田放送会館

全国大会では、県大会で優良賞以上が全国大会にデータでエントリーし、次のような素晴らしい結果を残した。

ラジオ番組部門

優良賞 名古屋市立神丘中学校
「イロんなかたち」

テレビ番組部門

優良賞 名古屋市立神丘中学校
「ツナグ　～魔法の言葉～」

アナウンス部門

優良賞 名古屋市立神丘中学校　中村洸太郎